Bibliophiles

ビブリオファイルズ　No.10(2023 年度)

新着図書案内・お知らせ　西宮東高校図書館

（ここで紹介するのは新しい本の一部です。）

『なれのはて』　加藤シゲアキ

男性アイドルグループ・NEWS のメンバーで小説家としても評価が高まっている作者の、最新作です。構想と執筆に約 3 年をかけ、443 ページにも及ぶ本作品は、戦争などの社会問題に正面から取り組んだ力作。

テレビ局員の守谷は、同僚から一枚の絵の写真を見せられ、展示会を開きたいと持ち掛けられる。「ISAMU INOMATA」と記されたその絵の作者を探すうちに、秋田県である男が焼死体で発見され、その弟の猪俣勇（いのまたいさむ）が行方不明になっている事実を守谷は発見するのだが・・

『クマにあったらどうするか ――アイヌ民族最後の狩人 姉崎等』　姉崎等ほか

2023 年は野生のクマが街中に出没する事案が全国で多発し、猟師の構造的不足もあって大きな社会問題となっています。では、突然クマにであったら、あなたはどうしますか？この本は、野生動物と共存する社会を営んできたアイヌ民族の、「最後の狩人」と呼ばれる姉崎氏が筆者です。最強のクマ撃ちによる、実践的クマ対処法をぜひご一読ください。

『見えない宇宙の正体 ダークマターの謎に迫る』　鈴木洋一郎

この宇宙がその始まり以来、ずっと膨張し続けていることはご存知？今もふくれ続けている宇宙ですが、何の力がふくれさせているのか、は分ってないのです。これを「ダークエネルギー」と言い、宇宙全体の約 68%にあたります。また全体の 27%の物質は、その正体が分らない「ダークマター」です。そう、正体が分っているのは宇宙全体のたった 5%・・この本は、近年注目を浴びるダークマターの実体に迫ります。

『力道山　人生は体当たり、ぶつかるだけだ』　岡村正史

「日本プロレス界の父」と呼ばれる力道山の評伝です。今年は彼の生誕 100 年にあたりますが、1950 年代の彼はまさに国民的ヒーローでした。（しかも生前は朝鮮出身であることがほとんど知られず。）当時は金曜 8 時というゴールデンタイムにテレビでプロレスが放映されており、力道山が得意の空手チョップで次々と白人レスラーを倒していく姿に日本人は熱狂したのですが・・衝撃的な彼の死の真相の究明にもご注目ください。

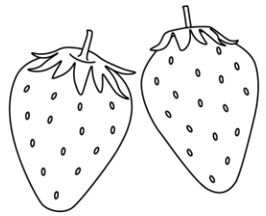
『東京都同情塔』　九段理江

今回の芥川受賞作ですが、「作品に AI を使用した」ことが賛否両論を呼び、芸術と AI のあるべき姿について話題を提供した本となっています。

舞台は近未来の東京。しかも（新型コロナはなく）予定通り 2020 年に東京オリンピックが行われたという、「パラレルワールド」の設定です。そこには新しいタイプの刑務所を建設する計画が持ち上がっていました。犯罪を犯した人を、ある意味「不幸」で「同情されるべき存在」として収容するという趣向の施設なのですが・・

『図解でわかるカーボンニュートラル燃料』　CN2 燃料の普及を考える会

自動車会社がひしめく欧州の EU。「2035 年以降はエンジン車は販売禁止」としていたのですが、昨年、「水素と CO2 でつくる合成燃料に限りエンジン車の販売を許可する」という方針に転換したのです。この本は、こうした合成燃料に加えて、CO2 を排出しない自然由来のバイオエタノールについても詳しく解説します。



『江戸の絵本読解マニュアル: 子どもから大人まで楽しんだ草双紙の読み方』　叢の会（編集）

「草双紙（くさぞうし）」って聞くと何だか難しそうに思えるかもですが、要するに「イラスト付きの物語」のことです。そう、現在の漫画やライトノベルの「ご先祖様」みたいなものなんです。そんな江戸っ子達の娯楽小説をのぞいてみませんか？

『葬送のフリーレン』　山田鐘人（原作）、アベツカサ（作画）

現在 TV アニメが放映中の、大人気ファンタジー漫画です。主人公のフリーレンは見た目は人間の少女ですが、エルフ族という一種の魔物で、もう千年以上を生きています。そんな彼女は人間の友と 50 年ぶりに再会し、その友に死なれたことで「どうしてもっと人間のことを理解しようとしなかったのか」と反省するのでした・・本作が初の連載となるアベツカサの、美術作品のように緻密な作画も大注目です。

『可燃物』　米澤穂信

人気作家の米澤氏が 2023 年のミステリーランキングの 3 冠を獲得した、話題作です。ミステリーというと、個性的な私立探偵が事件を解決するというパターンが多いですが、この作品の探偵は警察。群馬県警を舞台に、５つの事件が解決されていく短編集です。読みやすく、ミステリー初心者にもおすすめ。**森見登美彦『シャーロック・ホームズの凱旋』**も入りました。

今号のひとこと

物語に終わりは 必ずくるけれど
それでも君となら 「永遠」を信じてみたくなる
※　芦原妃名子(1974-2024)

『砂時計』『Piece』などの名作で多くの人の心をつかんだ漫画家が、みずからの命を絶ってしまいました。自身の作品の『セクシー田中さん』が昨年の 10 月からテレビ放映されていますが、番組制作側と軋轢があったことが自殺の原因と関係していたように取り沙汰されています。テレビ局側と芦原氏の主張にへだたりがありますし、遺書の内容も公表されていませんので、現段階では何が原因だったのか、は正確には分りません。しかし、彼女の死により実に多くのものが失われたことだけは、確かなようです。ご冥福を祈ってやみません。

※『砂時計』より